酒井彦一先生のご退官によせて

室　伏　　擴（生物化学科）

生物化学科が，酒井先生を新進気鋭の助教授としてお迎えしてから，早24年が過ぎ，研究者としても教育者としても脂の乗り切っていらっしゃる今，東京大学からお送りする年を迎えてしまったことは，大変残念なことです。

酒井先生が漂わせていらっしゃる自由な気風と，酒井研が行っている研究の混沌とした魅力に引かれて，私が卒研生として酒井研究室に入ったのは1969年で，途中数年間のブランクを除くと，現在に至るまで，20年近く酒井先生のご指導を受けて来たことになります。私が入室した酒井研は，当時三十代の酒井先生を初め，助手の木村一郎さん（現・早稲田大学教授），技官の遠藤幸子さん（現・助手）および数人の先輩大学院生から成る大変若々しい研究室でした。先生は，学生達に自由に研究をやらせる方針を取っていらっしゃり，かつ，ご自分も我々学生と同等に，実に勤勉に実験をなさっていらっしゃいました。例えば実験材料のウニも我々と一緒に三崎臨海実験所などに採りに行かれ，試薬作りや実験器具の洗濯も学生と全く同等になさっていたのです。しかし，自由な雰囲気とは裏腹に，酒井研の創世期，すなわち1960年代後半の仕事の方は，あまり順調でなかったように思われます。酒井先生も赴任されてからあまり月日が経っておらず，研究設備も不十分であり，また，学生も育っていなかったことがその理由ですが，最も主要な原因として，この時期には，細胞生物学の方法論がまだ確立していなかったことが考えられます。さらに，この頃はたいていの研究室で研究費が不足しており，科研費もなかなか当たらず，学生の我々は，科研費というものは“一応”申請を出しておくものであると思っておりました。この時代の我々は，実験で必要なものがあると，まず自分で作ってみるか，どこか別の研究室に電話して少し分けてもらうという具合で，後になって考えてみますと，これは大変貴重な経験でした。ここ十数年間は酒井研は大変裕福になり，科研費を申請すればほぼ確実に当たるという状況で，これはもちろん酒井先生の出された多大な業績の結果によるものですが，反面，貧乏であった頃に我々学生が得た何物かが，現在は失われてしまったのではないかという思いにかられることもあります。

酒井研の仕事が活発になり，論文が数多く発表され始めたのは1970年代に入ってからで，ちょうどこの時期は世界中で細胞生物学が盛んになってきた時期にあたります。細胞生物学において重要な位置を占める“細胞骨格の構造と機能”の研究で，酒井先生の研究がこの分野の発展に大きく寄与し，その結果，ご本人が好むと好まざるとに関わらず，この分野の“ボス”になられました。ただし，酒井先生は政治的に行動することは極度にお嫌いで，完全に庶民派であり続けられました。また，先生は，口には出されませんでしたが，常に学生の為を思って行動していらっしゃいました。60年代終わりから，70年代始めにかけて，学生と教師の対立が激化し，安田講堂籠城の結果，しばらく臭い飯を食べることになった学生が生物化学科にもいたわけですが，毎週のように拘留中の学生を訪ねて主要な論文のコピーを差入れて，いわばマンツーマンのセミナーをやって下さったのは，恐らく酒井先生ぐらいのものだったろうと思います。

先生は学問的なことのみならず，私的なことに関しても，一貫して学生と対等につきあって来られました。最近の学生さんにとっては，酒井先生は“雲の上の人”という風に見えるかも知れませんが，ふた昔前の酒井研は酒井先生を含めて，な

にやら全員が学生のような気分で過ごしておりました。現在は酒井先生はご自分の教授室をお持ちですが，かつては研究室の面積が狭く，我々学生がたむろしている部屋の片隅に先生の机があり，先生が机に向かっていらっしゃるその近くで徹夜明けの学生が寝ているという状況でした。詳しく言うと，昼時になると皆で弁当を広げるテーブルの上，あるいは部屋の中にずらりと並べてあったロッカーの上で寝ていたというわけです。前者の場合は，朝，人が入ってくると起きざるを得ないのに対して，後者の場合，転げ落ちる危険性が多少はありましたが，いつまでも寝ていられるという利点がありました。これに限らず，当時は，我々学生は随分野蛮なことを行っておりまして，アセトンが入っていた“石油かん”を切ってそれを鍋にして研究室のコンパをやったこともあります。そういった，いかにも一昔前の学生的な言動に対して，酒井先生は結構面白がっていらっしゃったように思われます。最近は学生の方がある意味で常識的になり，むしろ酒井先生の方が昔と変わらず，精神的に若々しくていらっしゃるのではないかという気もいたします。

酒井先生は，精神的のみならず，肉体的にもはつらつとしていらっしゃいまして，教職員のソフトボール大会には必ず参加され，しかもピッチャーをやられると相手チームは殆ど打てないというほどです。もっとも，相手チームは，「球が緩すぎて打てない」と負け惜しみを言っていたようですが…。ひょっとすると，かつての大投手，ニークロのナックルに匹敵する魔球を投げていられたのかも知れません。ソフトボールと同じ下手投げのスポーツで，これに関しては誰にも絶対文句を言わせないのがボーリングです。先生はアメリカ留学中，ボーリングの奥義を極められ（最高270点を出されたと聞いております），研究室や学科内で開かれるボーリング大会では，文字通り向かうところ敵なしです。お住まいの近くのボーリング場にはロッカーまで借りて，そこにご自分のボールその他をキープしてあるそうです。過去二，三十年，日本のボーリング人気は大きく変動しましたが，酒井先生のボーリングに対する態度は終始一貫しており，これまでのところ，弟子の誰一人として酒井先生のスコアを越えることができません。

ボーリングの他に，我々がはるかに及ばないことに，酒井先生の希に見る“楽天性”があります。これは研究についてのディスカッションにおいて最も顕著に現れており，我々がどのようなネガティブデータを出しても，決してその結果を否定なさらず，その中にポジティブな何かを見出されようとなさるのです。先生のこうした態度によって，データがなかなか出ない仕事をやっている学生達がどれほど救われたか，計り知れないものがあります。

生物科学科において二十数年間の長きにわたって，親身になって多くの学生の指導をなさり，研究においては，ある時は適度に我々を“放牧”し，またあるときは適度に手綱を引締め，我々を導いてくださった酒井先生に心からお礼を申し上げます。これからも日本女子大の新しい研究室において，ご研究が新たな展開を遂げることを期待申し上げます。